



君津商工会議所 FAX通信

会員の皆様へ…会頭からのメッセージ
平成28年5月10日(火)

Vol.3 27

地方創生に策はないのか

沖縄の共同店JAの直売所

秋元 秀夫

今度のゴールデンウィークは休みの長い人は10日余りも続いたと聞くにつけて、私は率直に言えば「休みすぎではないか」と思います。資源のない日本の資源は技術力と良く働く民族であった筈です。私流に言えばかつて日本の繁栄は働きすぎだと欧米から圧力をかけられた時代もありました。今でも中国や欧米にとって日本の技術力と高い生産性は次の時代への期待と脅威であると思われま

す。今、その日本を支えてきた中小企業・地方産業は世界の混乱の渦中に巻き込まれて我慢の時を過ごして居ります。政治も行政も「地方創生」を唱えながら具体策が全く無しの感じであります。財源不足、規制緩和を言われますが、中小・地方経済の実態が全く分かっていないのではとの疑問があります。議場や机上で討論・画策するより歩いて実態を先ずよく見聞して頂きたい。

先日JAの斉藤組合長のお話しに袖ヶ浦(ゆりの里)小櫃(味楽団)貞元(味楽団)の3ヶ所の直売所で20億円売上げましたときかされたので早速連休中巡回させてもらいました。袖ヶ浦(ゆりの里)は人気の袖ヶ浦公園と隣接し駐車場も共有?するなど公園客との相乗効果が移動する客から感じられました。車No.は地元車が多い様に見受けられました。小櫃(味楽団)は神奈川方面の車が多く見られたのはゴル

フ客の利用が多い様に思われました。貞元(味楽団)は地元No.の軽四輪車が多く地元買い物客が多い様でした。各店共通して、君津産の卵は大人気の様子でしたので組合長に聞くと「3ヶ所で1億1千万円位、カラーは200万本も売ります」との返事でした。「君津産」と大きく記されるだけでブランドになると思いました。単独な店ではなく、観光施設等と隣接効果が大きであります。

先日テレビで「沖縄のなんでもや共同店」が放映されました。100年程前糸満盛邦氏が自分の店があまりに儲かるので村人に開放し、地元住民みんなが株主となり、みんなの店として食料品、日用雑貨、農業資材仕入販売、茶畑経営、農産物等の販売・共同出荷・輸送、工事、修理、集落の需給何でもまかなう共同店であります。店内には机や椅子も置かれ集落の人達がワイワイガヤガヤ、子供達は共同店広場で遊んでいました。昔は県内にもこうした商店街がありました。この共同店は資本主義市場経済は巨大な大型店、コンビニチェーンによって日本各地の商店街を消滅させることなく人々が安心して人間らしく働ける場所を確保すると共に、貧富格差社会から町や集落を守るためであります。こうした共同店は沖縄以外の国内にも20店余り出来たと伝えられていました。

房総はこれから観光を軸として生き残ろうとして居ります。君津は全国の数少ない好条件の位置にあります。前述の様に一人で生き残るより皆で生き残ることを考えて頂きたい。

私達は「商売のプロ」です。JA直売所、道の駅、観光センター、各種サービス業、飲食店街、商店会直売所が集まるフロアで、「君津なんでもセンター」が出来れば老若男女共に働けるニュータウンシティとなり、人口も定着するでしょう。全国に例のない事を実現させることがこれから生き残れる道だと思います…が。

(5月6日記)